

審査の結果の要旨

林少陽氏の博士論文^平「イロニー」と「文」—西脇順三郎の詩学理論を手掛かりに—は、日本の近代詩を現代詩に転換するうえで重要な役割を担った詩人西脇順三郎の詩論を中心にしながら、その中心となる「イロニー」と「文」という概念を軸に、ヨーロッパ文化圏における批評理論と漢字文化圏におけるそれとの動的な相互関係を精緻な理論的分析をふまえて、歴史的に位置づけ直したものです。

林氏はまず、近代の欧米の批評における「イロニー」という概念の系譜を、ヘーゲルからキルケゴール、そしてそこから経由したケスパーグやポール・ド・マンの「イロニー」に対する解釈をとおして明らかにし、こうした修辞学再評価の流れを受容した中村雄二郎、前田愛、柄谷行人といった現代日本の哲学と批評理論における「イロニー」の位置づけを理論的にあてつけたいまう。こうした「イロニー」の系譜と西脇順三郎の使用した「イロニー」の概念を比較する中で、西脇の「イロニー」に対する解釈が、漢字文化圏における「反」という概念や「矛盾」という概念を媒介にしたところに独自性があることを明らかにしました。

次に林氏は、西脇順三郎の詩論における「文」という概念に注目し、漢字文化圏における「修辞」という二字熟語における「修」の論理的射程の広さを、古代から近世にいたる歴史的検証によって明確にしました。そして欧米文化との接触が始まる近代において、「修辞」という概念に内在していた身体性と倫理性が希薄になることを指摘し、あわせて江戸時代の漢学における二から語概念をめぐる歴史的文脈の中で、「文」と「辞」として「修辞」という三つの概念の有機的結合の模態を、理論化することに成功しました。

以上の歴史的検証を基に、林氏は西脇唯三郎の詩論と詩学
における中心概念である、「超自然」、「客観的の覚悟」、「純粋芸術」、
「純粋芸術」といった用語と、欧米の術語との影響関係として
なげなく、漢字文化圏における批評理論の中で「おへ」の位置が
け直し、「喫」という概念にこそ、西脇詩学の一つの要があること
を論証しつゝした。

林少陽氏の論文が文学研究として際立っているのは、一連の批評
概念の分析に基づき、西脇唯三郎の代表的な詩作の詩的表現自体を
自らの理論的枠組で解釈し直したところである。この作業をふるえこ
林氏は、西脇の詩と詩学と、やはり漢字文化圏の批評理論を深く理解
していた夏目漱石の「文学論」、横光利一の「形式論」との関係の
中での位置づけ直し、日本近代文学史の重要なとらえ直しを行つてい
る。

最終審査においては、個別の詩の分析は行われているが詩集全体
あるいは詩集同士の相互関係が明らかになつていないこと、現代詩に
おける西脇の果たした功罪が十分明確になつていないこと、論旨にか
かわる漢文刻読のいくつかの訂正、フロイトをはじめとする精神分析的な理
論への言及の不十分性などが指摘されるが、論文のスケールの大き
さ、影響関係に短少化しない豊富な文化圏を横断する論理の「行状」
のよさとしてとらえようとした方法の独自性などが、高く評価され、審査委員
会長の合意で博士(学術)の学位を授与することができるといふ判断
をしようとした。

2006年12月20日

小野陽一 